

---

# 東方日輪録

くれいく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方日輪録

### 【Zコード】

N7211Y

### 【作者名】

くれいく

### 【あらすじ】

生前?に何事も中途半端に終わっていた少女が新しい生を頑張るおはなし。

## プロローグ

私はどうやら死んだらしい。原因は多分熱中症だろう。夏だったし、暑いというか熱い中歩いてたし。人通りもなさそうな場所だった。

わざわざ探してくれるような友人もいない。親は親で夫婦仲良くやつてることだろう。

私は孤独だった。いつもいつもやることが中途半端で、迷惑をかけた。そうしているうちに、周りに人が居なくなつた。

一人になつて、悲しくなつた。どうしてこうなる前にもつとしつかりしなかつたのか。

一人になつてからはいつもその事だけを悔やんだ。悔やむだけで、動こうとはしなかつた。

その結果がこれである。死んだとすればもう悔やむこともない。このままぼうつとしていれば意識もなくなるだろう。

……死んだと言つなら、今のこの思考は何なのだろうか。あれか。なんでも中途半端で終わつてた私だ。多分中途半端に死んで……いやいや。中途半端に死ぬつてなにか。半殺しじやあるまいし。

とりあえず、閉じたままな感覚の目を開けよう。眩しいから奇跡的に死んでなかつたりとか、神様（笑）とかの真つ白な部屋だつたりとか、そういうのだろう。せーの。

「……まぶしい。いきてた？」

太陽が田に入ってきた、一瞬しか開けれなかつた。もそりと立ち上がつて辺りを見回す。

「……みじとなひまわつばたけ。うん、こんなとこしらない。たぶんゆめだらう」

独り言である。まあ、どうか誰もいやしな……

夢じやなによ。

声が聞こえる。といふか頭に響く感じがする。

「えーと、幻聴頂きました？」

残念だけど幻聴でもないんだ。

どうやら私の頭の中に妖精さんが住み着いてしまつたようだ。

「私の中に住むなら家賃でも貰いたいな。あ、前払いでよろしく」

住んでるわけじゃないけど、家賃といふか説明でもしようか。

「説明ふりーす！ どうなつてんのよ？」「かくかくしかじか、といふわけ。

「ふんふん。……分かつてたまるかドアホウ！ ちゃんと説明しない！」

……わかつたよ。

「分かつた。まとめるど、君は君らであつて、ここに咲いている向日葵。私は君らから生まれた？妖怪。人は定住しだしたばかり、と」

そういうこと。でも君は妖怪なのに妖力より魔力のほうが多いね。

人外宣告受けました。ついでにタイムスリップ？宣告も受けました。

どうしようと。

「まあ悩んでもしょうがないとして、妖力より魔力のほうが多いのか。どれくらいよ？」

僕らには漠然と多いことしかわからないよ。自分でわからないのかい？

「わからないから聞いてるんだけど。まあ確かに私に力があるのは  
感じられるけども」

「これはあれだな。修行しろとかそういう雰囲気。せっかく生きて  
た上に長生きできそうなんだ。頑張って修行をやり遂げよう。」

……でもその前に。

「食料と屋根のある寝床だよね」

といひことで、食料とねぐら探しになるわけだ。その前にまずは私の状況を確認しようではないか。

今は恐らく紀元前くらいだと思つ。だから狩りもしくは採取によつて食料を得ることになる。

まずは狩り。私は妖怪らしいのだが、この細腕では獣を狩るなんてとてもできないだらう。

力がなければ多いらしい魔力。使い方がわからん。アウト。周りには向日葵しかなく、武器になるような物もない。といひか獣に遭遇したところでこつちが狩られそうだ。

次、採取。毒とかやだよ？といひか向日葵しかないの。共食い？も嫌だ。

……あれ、詰んでない？

い、いやまだだ！まだ何があるはず……！ていうか起きてからしばらくたつけどたいしておなかへつてない。

どういうこつたい。向日葵の妖怪らしい。つまり植物。空には太

陽。あれだ、光合成でもしてんじやないかと。

そう思つたところでなにかしら無意識にやつてないか、自分の中を探るよう目に目を閉じる。

うーん、何となく服から何か入つてきてる気がする。あれ、何か浮かんで……

「太陽光を操る程度の能力?」

わーい。ファンタジーっぽい? 能力ゲットだぜー。

「……光全般じゃなくて太陽光つて辺りが中途半端で私らしい。納得」

まあ、太陽の光だ。人工のライトの光とか、火の光がダメなだけで、太陽の光ならたくさんあるじゃないか。

とりあえず光を操ると考えよ。

まずは屈折を試してみる。おお、なんか視界が歪んだ。次は思いつきり……。

ぐにやぐにやになつて気持ち悪い。1話目で吐く女の子とか嫌よ。……ん? なんか変なものの受信したきがする。

さて、何となくだが使い方がわかつてきた。花、太陽の光。攻撃。とくれば……。えつと、光を集めて、ちょっとやりにくいな。あつまれあつまれー。こんなもんかな? よし。

「ソーリーバーマー」

ジユッ

「……いやいや。ジユッ。真っ黒じいのか溶けてる……」

要加減。

現実逃避に話を戻そつね。なんだけ、えーと。食料どうじよつから光合成フラグか。そうだそうだ。多分服に何かあるんじやないかと。私じゃよくわからん。わからないのなら聞けばいいのよ。というわけで。

「向日葵さんや。わよひと聞きたことができたんだが」

「いいけど、土溶かさないでくれないかな?燃え移つたら大変いやないか。

「すいませんでした。予想と違つ結果になつて私もびつくりです

で、何なの?

「いやね、この服つてびつになつてゐるのかなと」

因みに今着てこるのは薄い緑のワンピース。髪は金色。髪色は  
…背中くらいかな。次、おそれおそれ下を見る。そこには大きくも  
小さくもないやはり中途半端な大きさのふくらみ。というか体形全  
く変わつてないな。容姿は……わからん。

その服は君の妖力、魔力を使って編まれたものだよ。汚れはつ  
かないし、穴が開いたり破れたりしても妖力なり魔力なり込めれば  
元に戻る。

「つまりこの体の一部に等しいわけだ。それならまあ納得がいく

葉緑素の代わりにでもなるのだろう。私の力で編まれたつてのな  
ら色とか変えるのかな。濃くしたら光合成が活性化……

思いつきり濃くしたらお腹いつぱいになりました。本当にありがとうございました。食料問題解決。おいしーものがないからしばら  
くじつするしかなそуд。

さて、それなら能力で何ができるかためそうじゃないの。

で、日が暮れた。何ができたかっていうと、自分の周りの光を屈折させて見えなくする。まだ自分がいることは不自然になつているらしいので要練習だ。

次に、某龍球の目眩まし技。さつきの屈折に疲れて遊び程度にやつたら一発でできた。でも光がまだ弱いので要練習。あれ、女の子がでこ出してぴかーってやだな。せっかくできたのにお蔵入りフラグが早速立ちました。

で、完璧に太陽が沈んでしまつたため、することが無くなる。横になろう。

空を見上げる。真っ黒な空。まんまるおつきさま。ちりばめられている星々。現代では考えられない光景だ。

あ、晴れているので一番大きい向日葵の下で寝てます。日印になるしね。ついでに川教えてもらつて顔確認しました。髪が金色になつて日が茶色になつていたこと以外は変化なし。そこら辺に居そうな特別可愛いわけでもない顔がありました。ちくしょー、こうこうときは可愛くなつてるもんでしょうに！

……愚痴つてもしようがない。夜は太陽がなくてあまり調子がないし、寝よう。

「夜に使えないってかなり不便だなあ……。夜でも太陽がでてればいいのに」

まるい月を見る。あの光も使えるなら つて月の光つて元々太陽の光じゃん！

ガバッと起きてから毎にやつたのと同じことをする。

結論、かなり弱くなるけどできました。姿消しならむしろ楽にできたが。

……どちらにせよ、使えたものではないので多いらしい魔力で魔法を覚えよう。そうしないとつらそうだ。

「一日目終わり。また明日ね」

そういうつづいて眠つてついた。

2 (前書き)

後半口記になつたやういました。

おはよう「」やります。暑いです。とりあえず無意識下の能力行使に常に涼しいか暖かいくらいになるよう陽射しを屈折するようにしたいです。

その前に「これからやる」と整理しよう。

まず今言つた陽射しの無意識調節。第一に夜間に問題なく活動できるように魔法の最低限の会得。最後に移動手段の確保。陽射しの調節に関しては日中のみやるとして、夜は魔法についてだ。魔法の次といつも、魔法で飛行術でも覚えればいい。

「つとその前に」

どうかしたの？

「」って地球のどの辺り？ついでに人とかこのあたりこないの？

君の知識からいふと、アメリカ大陸とやらになるのかな。人は来るよ。僕らは育てられてるんだから。

大陸……だと……！

どうしよう。何となく地球のつて聞いたけど、そりやあ定住始めたばかりで日本に向日葵なんてなかつたはずだとでも妖怪がここにいるんだし別に実は日本でだって

なんかすつ「」に汗流してるけど大丈夫？葉で影でも作ろつか？

「何気ない気配りが嬉しい……つてそういうやない！」

大陸。大陸なのだ。列島ではなく大陸。もし飛べなかつたら泳ぎ？もしくは水面でも走れと……？無理だらう。私は足が沈む前にだのできない。なんとしても飛行術を覚えなければ……。

「暑さでひにかしたら魔法覚えるんだ……」

とつあえず、姿を消さずに暑さの元である熱の部分だけを屈折させることから……。

日が暮れた。全くできない。夜だとあまりわからないので魔法へ移行することに。

やることは簡単。精神統一をして魔力をしつかり把握する。そしてそれを自在に操ることができればいいわけだ。

「……まあいい。なんであそこなつてんの」

座禅をしていたつもりが寝ていたらしく。まあ、日が昇っているので屈折に……。

日が暮れた。座禅。寝てた。屈折。日が暮れた。座禅。寝て……。

さて、涼しくなつてきたよ。皆さん。どうしまじょうか。  
といつのは置いといて、魔力と妖力は分けることができた。魔力  
が多いとか言われてなかつたらどっちがどっちかわからなかつたけ  
ど。さあ、次だ。ここからが本番だ。

「魔法の修業そのいち。体の外に出して操つてみよう

誰に言つてるの？

ビクウッとして顔を赤くする。

「ずっと話しあけてこないから君がいる」と忘れてた……

まあいい。某狩人漫画から拝借して、指先に丸めた魔力を浮かべて……。浮かべ……。う……か……ばない！

魔力を浮かべようとして早一週間。ようやく体から離れてくれました。こんな調子で飛べるようになるんだろうか……。

浮いた瞬間BANとかないよね。あつてたまるか。屈折に関しては熱のみを屈折させるというイメージがうまくいかず、苦戦している。やるうとしたら姿まで見えなくなるらしい。年単位でやることを覚悟しよう。あきらめずに遣り遂げることを目標に。

一ヶ月後。ある程度上手く操れるようになつたら数を増やして、としている。数が増えるという成果があるから楽しい。

だが屈折はいまだにできない。翌日から夜の修業を飛行に変えた。人類の夢だ。いやもう人じやないけど。

更に一ヶ月後。向日葵の一番大きなもの以外全て種を残して枯れてしまった。少し悲しくなったが、仕方ない。

しばらくすると種を探りに人がやってきた。声を掛けようと思つたが、ここは大陸。言葉が通じるはずもない。隠れてやり過ごした。すぐに浮くことはできた。しかしバランスがとりづらい。寒くなってきたが、光を集めれば問題はなかつた。少し眩しい点を除いて。

また夏になつた。私が目覚めてから一ヶ月になり向日葵達。相変わらず大きい。

飛行はスピードを出せばバランスをとれるようになつた。しかし燃費が悪いのか、すぐに疲れてしまう。

あとある日を境に妖力のほうが大きくなつた。これは一年を境にしてあるのかな? そしてでかい向日葵は更にでかくなつた。私が近くで生活しているからか?

向日葵が三代目になつた。屈折はまだできない。熱を屈折させようとしているからダメなのかもしない。飛行も別の視点から見てみよう。

まずは熱について。私の能力は屈折させるのではなく、操るのだ。無理に屈折にこだわらずに熱の部分を制限すればいいのではないか。……できた。あつたりできた。三年間の苦労はなんだつたんだ……。まあ一回飽きて球状に全反射するように能力使つてみたらそこが小さな太陽のようになつて焦つたのはいい思いでだ。

さて、次は飛行だ。コントロールと燃費の問題がある。が、まずは視点を変えてみる。

今はただ魔力で飛ぶようにしている。魔力。魔力を使い不思議なことを起こすのが魔法・魔術だ。魔法といえば火や氷、水、風などの属性だろう。

いまやっている飛行を無属性だとして、風に乗るよつこ、つまり風属性を意識してやればいいんじゃないの、と。

……思つたものの、風がそれなりに強く起きるだけだった。術式なんて小難しいことを無理だ。凡才で基礎すら知らない私に作れるはずがない。力技だ。

それから、といふものの、追い風を起こしつつ飛ぶようにすればスピードが出るよつになつた。後は太平洋を渡れるだけの飛行時間

を確保だ……。どれくらいだろうか。

「今はただ……飛び続けるだけ……」

## 2 (後書き)

次回、キンクリ。

### 3 (前書き)

原作キャラ出ました。  
あとが前も。

「どうも私は。あれから早くも五十年ほど、飽きもせずに飛び続けました。ついでに妖力も使って飛べるようになりました。

途中で別の魔法に逃げたけど。飛びながら。

能力タンク？が2つあれば、行けるはず……。といつも無理だつたら泣くしかない。いや死ぬ。

言葉が通じないここにいるのは辛い。向日葵は、向こうで育てれば離れてても問題ないとか。というわけで種をもらいました。

「それじゃあ、私は行くね。広い場所見つけたら君ら植えてあげるから」

「そう。少しの間寂しくなるね。ああ、これも持つていきなよ。

でかい向日葵。五十年間一度も枯れなかつた。ついでに恐ろしくでかい。そういうと、花弁の一枚が落ちてきた。ひらひらと落ちてきて、私の手に収まる。でかくて私の身長くらいあるけど。

「これは……？ あれ？」

光つて消えてしまった。いや指輪になつた。

「なるほど。今はまだ使い道が思いつかないけど、何か考えてみる戻るし、形だつて変えれる。君の服と同じよつな物だよ。

「なるほど。今はまだ使い道が思いつかないけど、何か考えてみるよ」

「それじゃあね。また話そう。

「うん、またね」

別れになる。が、持っている種を植えて育てれば大丈夫だ。ずっと別れるわけじゃない。

私は、東へと飛んだ。

日本列島とやうは、西に飛んだほうが近いよ。

「えつ」

「ここにうやうとりがあったのは氣のせいだ。

三日後、無事に日本についた。一日ハワイで、もう一つ島で休憩して。

「まずはあれだ。向日葵植えるのは場所を選ぶだろうから、人を探そつ。というか何か食べたい」

どこへ行こうか。そう考えながら休憩する。適当に移動して襲われたりとかしたくないし。血を見るのはたぶんダメだからソーラービームで跡形もなく消せば……。こっちのが危ないか?こんな思考してゐるのも妖怪になつた影響か。

「妖力でも魔力でもないなんかでかい力?と私なんか比べものにならない量の魔力。どっちのところへ行くか」

前者。何となく近寄りがたい感じがする。かなり昔な訳だし、神様とかかもねー。私妖怪だし、退治されかねない。

後者。私は魔法使いでもある。魔力持ちなら魔法を教えてもらえないだろうか。そんな短絡的な思考で魔力の元へと向かった。

「そんなわけで魔力の元に到着しました。でも何もないです。どうしましょー」

「うむ……。と唸つているとなんか入り口みたいのができた。入れつてことだろうか?」

「……お邪魔します？」

何故か疑問系て挨拶しながら入る。突然攻撃されたりとかしないよね。

それなりに長かったトンネルみたいな空間を抜けた。そこにいたのは……。

「いらっしゃい、新米魔法使いさん。歓迎するわ」

と、赤というより紅のローブに銀色の髪でたくましいサイドテールを作った女性がいました。

「あ、ありがとうございます。いつ私が居たことに気が付いたんです？」

用意してましたと言わんばかりの「」挨拶。

「あなたがこの島に来たあたりからね～。私は神崎。ここは魔界ね」

「魔界……。魔界ですか」

本気でファンタジー。しかもラスダンとかじゃないの？

「ちなみに私は魔界神やつてたりするわ」

まつせり、魔界神。まかいしん。魔界の神様。……。

「な、なんだつてーー。」

「ラスボスじやないつすかー魔界のトップに直々お出迎えられる私。どうこいつことなの。」

「な……なんで魔界の頂点サマがこるんでせつか？ ああ、敵は排除とかいつあれですね。わよつなり回りつてこるみんな……」

「何を勘違いしてのつか知らないけど、違ひやーー」

「く?じやあなんで……」

「魔界神とは言つても、まだ魔界ができるばかりなのよ。だからお出迎えして大丈夫そつなり色々手伝つてもらおうかと、ね」

「はあ……。あ、自己紹介がまだでした。私は口向葵です。向口葵の妖怪やつてます」

あ、びつむ。名前言つてなかつた氣がするけど今言つた通り田向葵です。生前からこの名前です。

「じやあ葵ちゃんね。葵ちゃんがよくなればひまわりでもここに来

……

「……ひまわりやまねやつてください」

おやべりへまわつからだわつたび、なんか嫌だ。

「まあ立ち話も何だし、つらに行きませよ。家族も紹介するわ」

家族がいるらしい。神様家族か……。

で、神綺さんの家。というか館。でけえ。

「アリスちゃん、夢子ちゃん、ただいまー！新しい家族ができたわよーー！」

はは。何をおっしゃるこの神様は。いきなり家族だなんて。ドタドタ、と走るような音が聞こえる。少しづつ近づいてくる。ドタン。あ、こけた。

「ママービーの男引つ掛けてきたのー？それとも攫いー？」

親が親なら子も子か？と少しの後悔を心の片隅に感じていると、一瞬でそれは消えた。

足音が消え現れた姿に田を見開いた。そして思わず呟く。

「可愛い……」

「女の子……つてことは攫つてきたのねー。」

なんか思考が変な方向に行つてゐる幼……女の子。これは訂正しなければ。

「私は攫われてきたわけじゃないんだけど……。魔界にきたら神崎さんに案内されただけだし」

「あらやつなの? こいつがママちやんと説明してよー。」

あらあら~。元氣ねー。ヒーヒーヒーの神崎さん。のんびりした人? だなあ……。

「えーとね。」の子は田向葵ちゃん。魔界の新しい住人で……」

「ちよつとまつて。」じやなくて座つて紅茶でも飲みながらこしよ

なんかお母さんがのんびりな分子どもがしつかりしてゐみたいだ。大変そうだなー。

「今の話の通りならあなたも一緒になるのよ」

心を読まれた。

で、テープルにつくと夢子さん？が紅茶を持つてきてくれた。喉が渴いていたのでいただく。

「はふう……」

「……なんで紅茶飲むなり泣いてるの？どうかした？」

「いや……五十年ぶりに味があるもの口にしたかい……」

「「「」、五十年…？」」

めつちや驚かれた。

「夢子ちゃん！急いで夕飯！」

「はーーすぐに用意します！」

「飯もすぐに用意された。

美味しいものが食べられ、今までにない満足感と安心感が得られた。

「えと、夕食まで用意してもらひて申し訳ない……」

「いいのよ。今日から私の娘になるんだから、遠慮しないの」

「いいんですか？私みたいなよくわからない人を家族にして」

「ママがいひつて言つてゐるんだからいいのよ、お姉ちゃん」

「アリスちゃんも認めてるし、あなたさえよければ」

孤独になつて約半世紀。他人に必要とされたのは初めてかもしけ

！それが……」なんにも嬉しいものだなんて……。

答えは、決まっている。

「私なんかによければ、よろしくお願ひします」

「詳しこうさせ留田にして、今日は寝ましょう。みんなで一夢子ちゃん起がれ。」

「はーい！」

「わかりました」

六十年ぶりの人の温もりは、暖かかつた。

### 3 (後書き)

何故か娘に……。どうしてこうなった。  
ラストは何となく考えてたけど全然違う方向にいきそうな気がする  
なあ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7211y/>

---

東方日輪録

2011年11月23日18時56分発行